イディオム解釈とアドホック概念*

井門　亮

1. はじめに

Wilson（2004）や Wilson and Carston（2007）に代表される関連性理論の最近の研究では、発話解釈と同様に、語解釈の際にも推論がかかわると主張している。つまり、関連性の原理に制約された推論プロセスを通して、聞き手は符号化された語の概念を調整し、解釈を行うと考えるのである。この語用論的プロセスは「アドホック概念構築」と呼ばれ、発話の明示的意味の分析に加え、メタファーなどの修辞的表現の解釈についても、アドホック概念の観点から活発な議論が展開されている。本稿の目的は、本来は語レベルでの解釈を説明するために提案されたアドホック概念が、さらに大きな単位である句レベルでの解釈にも適用できるのか、イディオムを通して検討することにある。アドホック概念を援用したイディオム分析には Vega Moreno（2001，2003，2005，2007）があるが、本稿ではその分析を概観し問題点を指摘するとともに、今後の検討課題についても言及していく。

2. 関連性の原理とアドホック概念構築

2.1. 関連性の原理：Sperber and Wilson（1986/1995）

それでは本論の理論的基盤として、関連性理論における語解釈に対する考え方を紹介することから始めよう。Sperber and Wilson（1986/1995）によって提案された関連性理論は、不十分な情報しか符号化していない発話から、いかにして話し手の意図した意味を聞き手は推論するのか、その解釈プロセスの解明を目指した理論である。そこでは、人間の発話解釈を制約する原理として、(1)にある「伝達的関連性の原理」が提案されている。

(1)　伝達的関連性の原理[1]

すべての発話（または他の顕示的刺激）は、それ自身が最適な関連性[2]を持つことを当然視している旨を伝達している。

この伝達的関連性の原理が示しているのは、話し手が発話をすることはそれ自体、「私の話を聞きなさい。あなたの認知環境改善につながる（＝認知効果を持つ）情報が、解釈のための不必要な努力（＝処理コスト）を払うことなしに得られますよという呼びかけを聞き手にしていることにほかならない」[3]（今井 2005：120）ということである。従って、(2) の解釈の手順が示すように、発話を処理する際に、符号化された情報をもとにして、聞き手はなるべく少ない処理コストで、注意を払うのに値する十分な認知効果を得ようと解釈（推論）を始める。そして、費やしたコストに見合うだけの関連性が得られたところで解釈をストップし、その解釈が話し手の意図したものだと判断するのである。

(2)　関連性理論による解釈の手順

処理コストが最小になるような道をたどりながら、認知効果を計算する。

a. 解釈（指示対象付与や一義化、コンテクストの選択など）を、接近可能な順序で吟味し、

b. 予測された関連性のレベルまで達したら（または達しなかったら）解釈を打ち切る。

2.2. アドホック概念構築

Wilson（2004）や Wilson and Carston（2007）に代表される、語の語用論的解

1 (1) と (2) は、今井（2009）に基づく。

2 最適な関連性とは、ある発話が、(a) 聞き手が少なくとも処理するに値するだけの関連性を持ち、(b) 話し手の能力と選択が許す範囲内において最も高い関連性を持つ場合のことを言う。

3 認知効果は、ある情報（発話など）を処理することによって、(a) 不確かなコンテクスト的想定を強化する場合、(b) コンテクスト的想定と矛盾し、誤った想定を放棄する場合、(c) コンテクスト的想定と結びつき、コンテクスト的含意を引き出す場合に得られる。そして、他の条件が同じであれば、認知効果が高ければ高いほど、関連性は増すと定義される。一方処理コストは、その情報が、最近使われたかどうか、頻繁に使われるかどうか、言語的・論理的に複雑かどうかなどが影響し、他の条件が同じであれば、処理コストが低ければ低いほど、関連性は増すと定義される。

釈に焦点を当てた最近の関連性理論の議論では、発話レベルだけでなく、語レベルでの解釈においても、上に挙げた伝達的関連性の原理と、関連性理論による解釈の手順がかかわっていると指摘する。つまり、語解釈の際にも聞き手は関連性の原理に一致する解釈を求めて推論を行い、コンテクストに応じて符号化された概念を調整し、その場限りの概念を構築して解釈すると考えているのである。このプロセスは「アドホック概念構築」[4]と呼ばれ、符号化された概念が緩められる場合（語彙的拡張）と、狭められる場合（語彙的縮小）に分類される。

それでは、符号化された概念が緩められて解釈される例から見ていくことにする。

(3) a. この肉、まだ生だよ！
　　b. 花子は天使だ。

(3a) がレストランでステーキを食べようとしている場面で発せられたとしよう。そういったコンテクストでは、この発話にある「生」という語が、「全く火が加えられていない状態」という符号化された意味のままで解釈されることはまずないだろう。聞き手は「中まで十分に火が通っていない」という意味で解釈するはずである。(3b) も字義通りの意味ではなく、「花子はやさしくて心の清らかな人だ」と解釈される。これらの例から、語によって符号化された意味が、常に話し手の意図した意味としてそのまま理解されているわけではないということが分かる。聞き手は語によって符号化された概念を手がかりに推論を行い、話し手の伝えようとする概念を解釈しているのである。(3) では、コンテクストに応じて、語によって符号化された概念を拡張する方向で推論が行われていると言える。この語解釈のプロセスは「語彙的拡張」と呼ばれ、単純化して図示すれば、以下の図１のようになる。

4 一義化、飽和、自由拡充といった推論による作業とともに、アドホック概念は、発話の意味の明示的側面である明意（explicature）の復元にかかわる。符号化された概念と区別するために、アドホック概念は、CONCEPT*, CONCEPT**のように、右肩にアスタリスクを付けて表記されるのが一般的であるが、本稿では日本語や句レベルの事例を考慮に入れて、[CONCEPT]*, [CONCEPT]**という表記を使用する。

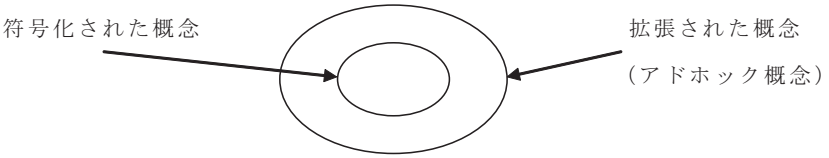

図１　語彙的拡張

概念が緩められる例とは対照的に、符号化された概念が狭められて解釈される場合もある。次の例を見てみよう。

(4)　a.　誰か独身の人を紹介してください。
　　b.　赤い顔／赤い目／赤い髪／赤いリンゴ／赤いスイカ

(4a) にある「独身」の符号化レベルでの意味には、結婚していない人であればどのような人でも含まれる。しかし、例えば、この発話が結婚を考えている女性のものだとすれば、話し手の意図する「独身」の意味を、聞き手は「結婚相手にふさわしい若くて経済力のある未婚の男性」といったところまで狭めて解釈するだろう。(4b) でも「赤」という語で符号化された一般的な概念が、それぞれのコンテクストに合ったより具体的な「赤」へと狭められて解釈されることになる。つまり、これらの例では、符号化された概念よりもより限定的な概念が解釈されるのである。このプロセスは「語彙的縮小」と呼ばれ、以下の図2のように表すことができる。

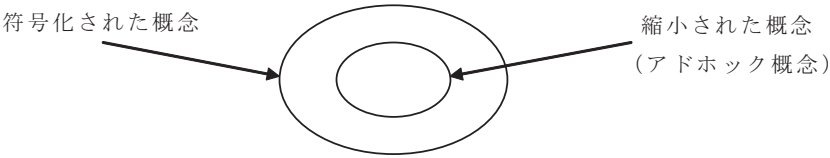

図２　語彙的縮小

以上、語解釈の際にも推論が行われ、コンテクストに応じて符号化された概念が調整されるとする、関連性理論での主張を概観してきた。ここで示した通

り、Wilson（2004）や Wilson and Carston（2007）などによるアドホック概念の議論は、語が関与するものに限定されている。しかし、Vega Moreno（2007）によるイディオム分析では、Wilson らの議論をさらに一歩進め、句レベルでもアドホック概念が構築される可能性が指摘されている。この点については、4.1. 節で詳しく見ていくことにする。

3. イディオムとは

アドホック概念の適用範囲が、いかに句レベルまで拡大されるのか、Vega Moreno による提案を検討する前に、その分析対象であるイディオムの定義[5]について簡単に見ておくことにしよう。

(5) a. 単語の 2 つ以上の連結体であって、その結びつきが比較的固く、全体で決まった意味を持つ言葉 （宮地 1982：238）

b. 2 語（以上）の連結使用が固定しており、全体の意味は構成語の意味の総和からは出て来ないもの （国広 1985：7）

こういったイディオムの定義に共通するのは、統語的には使用が固定した 2 語以上の連結であり、意味的には個々の構成語の意味の総和からは、句全体の意味が導き出せないということである。以下の例（6）を通して、これらの点についてさらに詳しく見ていこう。

(6) どうやら彼は途中で油を売っていたようだ。

統語的な側面について、「油を売る」というイディオムを受動態にして「油が売られた」としたり、名詞句の取り立てを行って「売っていたのは油だ」と変形したりすると、イディオム本来の「怠ける」という意味では解釈できなくなってしまう。つまり、「油を売る」という形式で、このイディオムの使用は固定さ

5 イディオムの定義については、Vega Moreno（2007）の第 6 章や、Numberg, *et al*.（1994）、籾山（1997）なども参照のこと。

れているのである。このことは、「油」を類義語の「石油」などに置き換えると、イディオムとしての意味を伝えられなくなることからも明らかであろう。意味的な側面についても、構成語である「油」と「売る」のそれぞれの意味を合わせても、「怠ける」という解釈が引き出せないのは言うまでもない。

英語のイディオムにも同様のことが当てはまる。次の（7）を見てみよう。

（7）　John kicked the bucket.

（7）にある kick the bucket は、「死ぬ」という意味のイディオムであるが、これを受動態にした The bucket was kicked by John. では、「ジョンによってバケツが蹴られた」という意味にしかならないし、構成語である kick, the, bucket の個々の意味を合わせただけでは、「死ぬ」という意味にはならないのである。

4. イディオム解釈とアドホック概念

4.1. Vega Moreno（2007）によるイディオム分析

これまで見てきたように、イディオムとは、使用が固定した 2 語以上の連結であり、個々の構成語の意味の総和からは、句全体の意味が導き出せないものとされる。しかし、こういったタイプのイディオムは比較的まれな例であり、各構成語に意味を割り振ることのできるものの方が多いという指摘もある。例えば、前出（6）の「油を売る」とは対照的に、（8）の「足を洗う」というイディオムでは、「足」が「好ましくないこと」を、「洗う」が「やめる」を意味していると考えられるのである。

（8）　彼はようやく麻薬から足を洗うことができたようだ。

Vega Moreno（2007）は、（6）のタイプと（8）のタイプにイディオムを二分するのではなく、両者は連続体を形成しているとする。つまり、イディオムの意味が、各構成語から導き出せないものから、（部分的にでも）導き出せるものまで、その違いを推論の程度の問題と捉えているのである。そして、日常会話

で用いられる発話の解釈と同様に、イディオムの解釈も（2）に示した解釈の手順に沿って行われ、その際には句レベルでアドホック概念が構築されるとする。以下で、Vega Moreno による分析に基づき、イディオム解釈とアドホック概念との関係について見ていくことにしよう。

それでは、連続体の一方の端に位置する（6）のようなイディオムから検討していく。上述の通り、このタイプのイディオムは、各構成語の総和から句全体の意味を引き出すことはできない。このことから、その解釈には、発話中に意味の分からない語が出てきた際に、その意味を前後のコンテクストから推論しようとするのと同様の解釈プロセスが働いていると Vega Moreno は仮定している。次の発話を見てもらいたい。

（9）　その企業は、PC だけでなく、今後はスマートフォンやタブレットといったモバイル分野でのセキュリティ対策にも力を入れていく予定である。

（9）を聞いて、発話中の「タブレット」（タッチパネルなどを備えた携帯可能なパソコン）という語の意味が分からなかったとしよう。そうすると、この発話を完全に解釈するためには、その語の意味を話し手に尋ねるか、コンテクストや発話の他の部分から推論しなくてはならなくなる。後者の場合、推論によってたどり着ける最も関連性のある解釈は、この語が、おそらくスマートフォンと同等の機能を持つモバイル機器のことを指しているというものだろう。この解釈プロセスは、聞き手が「タブレット」の正確な意味を復号化していると言うよりは、その語の「仮の意味」を推論し、「スマートフォンと同等の機能を持つモバイル機器のこと」といったアドホック概念［タブレット］*を構築して解釈を試みていると捉えることができるのである。

（6）のタイプのイディオム解釈にも、これと同様の説明が適用できる。（10）のコンテクストで、（6）の「油を売る」が用いられたとしよう。

（10）　まずいことに、外回りの営業中に喫茶店で油を売っているところを、上司に見つかってしまった。

「油を売る」というイディオムの意味を聞き手が知っていれば、この発話の解釈に問題はないが、もしその意味を知らなければ、各構成語の意味から解釈しようとするかもしれない。しかし、それでは関連性のある解釈は得られないだろう。そうすると、(9) の解釈を行った時のように、聞き手はコンテクストから関連性を求めて推論を行い、このイディオムの「仮の意味」として、句レベルでアドホック概念を構築することになる。つまり、コンテクストに基づいて、「仕事中に時間をつぶす」といった意味のアドホック概念［油を売る］*を構築して解釈を行うのである。

それでは、連続体のもう一方の端に位置する (8) のようなイディオムの解釈は、どのように説明できるだろうか。前述の通り、このタイプのイディオムの意味は、ある程度、構成語の意味から解釈することが可能である。この点に着目すると、解釈の際に、聞き手は各構成語の字義的な意味から関連性を求めて推論を行い、句全体のイディオム的な意味を導き出していると考えられる。例えば (11) のコンテクストで、(8) の「足を洗う」が用いられたとしよう。

(11)　弁護側は「被告は全面的に捜査に協力しており、逮捕を機に足を洗うと決意している」などと訴えた。

この場合、「足」と「洗う」が、それぞれ「好ましくないこと」と「やめる」を意味しているということが少ない処理コストで推論できるだろう。つまり、句の字義通りの意味から関連性を求めて推論を行い、「好ましくないことをやめる」という意味のアドホック概念［足を洗う］*を構築して解釈するのである。

4.2. Vega Moreno (2007) によるイディオム分析の問題点

以上の通り、Vega Moreno (2007) は、イディオムの解釈では、発話の関連性を求めて推論を行った結果、句レベルでアドホック概念が構築されるとしている。この分析の貢献は、アドホック概念構築という推論プロセスの適用範囲を句レベルにまで拡大し、語と句の両者とも同一の認知的プロセスを経て解釈されるということを示した点にある。しかし、Vega Moreno の分析にも検討すべ

き問題が残されているように感じられる。以下で、Vega Moreno の主張に対する問題点をいくつか指摘していきたいと思う。

まず１つ目の疑問として、日常会話で頻繁に用いられ、その意味が定着してしまっているイディオムの解釈の際にも、推論、つまりアドホック概念の構築が行われているのだろうかという点が挙げられる。

もちろん聞き手の知らないイディオムや、その場で初めて使われるような新奇性の高いイディオムなどについては、Vega Moreno が主張するように、その場その場で推論し、句レベルでアドホック概念を構築して解釈が行われていると考えられる。また、そういったイディオムの意味が、各構成語から導き出せないものから、（部分的にでも）導き出せるものまで、推論の程度によって連続体をなしているという見解も支持できる。しかし、前出（7）の kick the bucket のような、言わば使い古されたイディオムについては、直観的にも、もはやアドホック概念構築という推論レベルではなく、復号化レベルにおいて解釈が行われているように思えるのである。この点については、Wilson らも、当初は推論によってアドホック概念として解釈されていた語の概念が、使用が重ねられるにつれて、次第に符号化された概念として語彙化される可能性を指摘している。（7）のようなイディオムが、まさにそういった事例に相当するのではないだろうか。この主張が正しければ、Vega Moreno の提案する「推論によるイディオム解釈の連続体」に、復号化によって解釈されるものをどう位置づけるのか、検討する必要があるだろう。

２点目として、イディオム解釈の際には、句全体で１つのアドホック概念が構築されると Vega Moreno は主張しているが、句全体ではなく、構成語の一部のみにアドホック概念が構築され、残りの構成語は、符号化された意味のままで解釈される場合もあるという点を指摘したい[6]。

これに関連して、Carston（2002：358-359）に興味深い記述がある。Carston は、イディオムについては触れていないが、文全体がメタファー的に用いられた例（12）を挙げ、文レベルでアドホック概念が構築される可能性に言及している。（12a）は倒産しかかっている企業の状況についての報告、（12b）は気難

6 この点については、Vega Moreno（2007：179-180）でも言及されているが、十分な議論はなされていない。

しい上司におびえている部下の発話である。

(12) a. Despite lavish nursing, the patient has yet to leave his sick-bed and take a few tottering steps in the sunshine.（金を惜しまず看病してきたが、その患者は、病床を離れ、屋外でよろけながらでも歩くまでは回復していない。）

b. When the old lion wakes up and starts roaring again we had all better run for cover.（あの老ライオンが目を覚ましてまた吠え始めたら、どこかに避難した方がいいだろう。）

Carston は、(12a) の解釈の際には、(13) のように文全体で 1 つのアドホック概念が構築される可能性があるとしている。

(13) [[THE PATIENT] [HAS YET TO [[LEAVE HIS SICK-BED] AND [TAKE A FEW TOTTERING STEPS IN THE SUNSHINE]]]] *

しかしその一方で、文全体ではなく文中の一部の語や句のみにアドホック概念が構築され、それに残りの語の符号化された意味が加わって解釈されるという可能性も指摘している。(12b) の例で言えば、(14) のように、lion, wakes up, roaring, run for cover といった語や句に対してはアドホック概念が構築される（メタファー的な意味へ語彙的拡張が行われる）が、残りの部分は符号化された意味のままで解釈されるとするのである。

(14) WHEN THE OLD [LION] * [WAKES UP] * AND STARTS [ROARING] * AGAIN WE HAD ALL BETTER [RUN FOR COVER] *

Carston は両案を併記するにとどまり、どちらの説明が妥当であるかについては明言を避けている。しかし、一部のイディオムには、(14) で指摘されていることが当てはまるように思われる。つまり、句全体ではなく、部分的にアド

ホック概念が構築されていると捉えるのが妥当であるように感じられるイディオムが存在するのである。次の例を見てもらいたい。

(15)　遠足で 30km も歩いたので、足が棒になった。

(15) にある「足が棒になる」は、「長い間歩いたり、立ち続けたりしたため、足の筋肉がこわばる」という意味のイディオムである。このイディオムを Vega Moreno（2007）に基づいて説明すれば、[足が棒になる] *のように、句全体がアドホック概念として解釈されることになる。確かにイディオムは、句単位で使用が固定されていているため、句全体でアドホック概念が構築されているとする説明は、理にかなっているように思えるかもしれない。しかし、このイディオムをさらに詳しく見てみると、「足」という語が、「歩行に使ったり、体を支えたりする身体部位」という字義通り意味のままで用いられていることに気付くだろう。そうすると、Vega Moreno が提案するように、句全体でアドホック概念が構築されているのではなく、[足が [棒] *になる] のように、「棒」という語に対してのみアドホック概念が構築され、それが残りの語の符号化された意味と組み合わさって、句全体の解釈が行われていると捉え直すことも可能ではないだろうか。この例が示すように、イディオム解釈については、句全体でアドホック概念が構築されるといった大局的な見方をするのと同時に、細かくその内部にまで考察を深める必要があるように思える。次節で挙げる検討課題にもこの点は大きく関係してくることになる。

5. おわりに：今後の検討課題

上述のような問題点がある一方、アドホック概念に基づいたイディオム分析は、さらなる研究の可能性を示唆しているようにも思われる。最後に、イディオムとアドホック概念に関して今後の検討課題を挙げて、本論の結びにかえたいと思う。

1 点目は、岡田・井門（forthcoming/2012）で指摘している、2 語以上の語が組み合わさることによって、新たな概念が構築される例についてである。

(16) a. 就職氷河期（極度の就職難のこと）
b. 埼玉都民（埼玉県に住みながら東京に通って生活する人のこと）
c. 昼食難民（昼食時の混雑から昼食をとることができない人のこと）

こういったイディオム（熟語）は、非常に新奇性が高いため、その解釈にはアドホック概念がかかわっていると考えられる。ただし、これらの例についても、句全体で 1 つのアドホック概念が構築される可能性と、前出 (15) の例で示したように、それぞれ、[就職 [氷河期] *]、[埼玉 [都民] *]、[昼食 [難民] *] といったように、構成要素の一部にアドホック概念が構築され、それが残りの語の符号化された意味と結合して解釈される可能性の両方について検討する必要があるだろう。

もう 1 つは、国広（1985, 1989, 1997）で提案されている「枠組慣用句」についてである。枠組慣用句とは、(17) に挙げる「A も A なら B も B」、「A が A だから」といった表現のように、句全体の文法的な枠組みだけが固定されたイディオムを指す[7]。

(17) a. たとえばカッコウは、これまでオオヨシキリの巣に卵を産みつけてきた。いわゆる托卵である。産んだ数だけ相手の卵を喰って数を合わせる親も親ならヒナもヒナで、ほんものより一足はやくかえると、眼も見えないのに背中で押してほかの卵を巣から落とす。
b. おじいちゃんが海外旅行に行くって言うんだけど、年が年だからちょっと心配だね。
c. なにしろ、いちど酔いつぶれてみたいと言っているくらいに、強いことは強いのである。
d. 以前だったら苦労して自分で持ち帰ったものを、お金があるから宅配便に託してしまう。ぜいたくな話だが、これは進歩といえば進歩なのかもしれないし、ありがたい文化といえばありがたい文化なの

7 枠組慣用句の例として、国広（1985, 1989, 1997）は全 12 表現を挙げている。枠組慣用句については、野呂（2008, 2009）なども参照のこと。

かもしれない。

e. ええ、酒田は活気がありますが、ここは静かは静かです。

(18) 句全体のいわば文法的な枠組みの部分だけが固定していて、その中で用いられる名詞・動詞などの実質語はかなり自由に入れ替えることのできるもの、つまり変項を含んだ慣用句というものもある。枠組みの部分が示す意味はその文法構造から直接に出てくるものとは異なっているので、これも一種の慣用句としなければならない。　（国広 1989：40）

Grice（1989）の「会話の公理」[8]に照らすと、(17) に挙げた枠組慣用句は、同一の語が反復して用いられているので、「量の公理」（自分の貢献を要求されているだけの情報を与えるようなものにせよ）に違反し、無意味なことを述べているとされるだろう。しかし、コンテクストの中でこれらの枠組慣用句が用いられると、字義通り以上の意味を伝達することになる。その意味は、個々の構成語の総和からは引き出すことのできないものである[9]。

それではそういった意味は、どのように解釈されるのだろうか。枠組慣用句は、その名の通り枠組みのみが固定されていて、句の中で用いられる語は、その場その場で入れ替えることができるものである。この点を踏まえると、その解釈にもアドホック概念が関与していることが十分に予想できるだろう。1つの可能性として、(17) の枠組み慣用句で反復して用いられている同一の語のうち、1つ目の語は符号化された意味のままで解釈されるが、2つ目の語に対しては語彙的拡張または語彙的縮小が行われ、アドホック概念として解釈される可能性を指摘しておきたい。例えば、(17a) の「A も A なら B も B」であれば、［A も［A］*なら B も［B］*］といったように、部分的にアドホック概念が構築されると仮定するのである。しかし、この仮定を検討しようとすると、ここ

8 Grice の提案する会話の公理は、量、質、関係性、様態の 4 つの公理から成り立っている。詳しくは、Grice（1989：26-27）を参照のこと。

9 国広（1997：277-280）によると、「A も A なら B も B」は「A も B も常軌を逸している」、「A が A だから」は「A がご存じのような状態にあるので」、「A ことは A」は「A をちょっと譲歩して認める」、「A といえば A」は「A であることをちょっと譲歩して認める」、「A は A」は「ちょっと譲歩して A であることを認める」といった意味をそれぞれ伝えるとしている。

でもまた、アドホック概念の構築されるのが句全体か、構成語の一部かという問題に直面することになる。この点を含め、本節で取り上げた事例は非常に興味深いものなので、詳しい検討については稿を改めたいと思う。

＊ 本研究は、2010 年度学習院大学外国語教育研究センター研究プロジェクト「関連性理論の研究」、及び科学研究費（課題番号：23520577）「関連性理論に基づいた日・英語のイディオム解釈に関する認知的研究」の成果の一部である。なお、本論の一部は、岡田・井門（forthcoming/2012）に基づいている。

参考文献

Carston, Robyn（2002）*Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*, Oxford: Blackwell.

Grice, Paul（1989）*Studies in the Way of Words*, Cambridge, MA: Harvard University Press.

今井 邦彦（2005）「語用論」中島 平三（編）『言語の事典』109-143, 東京：朝倉書店.

今井 邦彦（編）井門 亮・岡田 聡宏・松崎 由貴・古牧 久典・新井 恭子（訳）（2009）『最新語用論入門 12 章』東京：大修館書店.

国広 哲弥（1985）「慣用句論」『日本語学』4, 4-14.

国広 哲弥（1989）「文法にも慣用表現がある」『月刊言語』18: 2, 40-41.

国広 哲弥（1997）『理想の国語辞典』東京：大修館書店.

宮地 裕（編）（1982）『慣用句の意味と用法』東京：明治書院.

籾山 洋介（1997）「慣用句の体系的分類－隠喩・換喩・提喩に基づく慣用的意味の成立を中心に－」『名古屋大学国語国文学』80, 29-43.

野呂 健一（2008）「同語反復表現「X といえば X」におけるカテゴリー化について」『日本認知言語学会論文集』8, 223-233.

野呂 健一（2009）「日本語の動詞反復表現：「V ても V ても」「V には V」を例として」『日本認知言語学会論文集』9, 92-102.

Numberg, Geoffrey, Ivan A. Sag and Thomas Wasow（1994）“Idioms,”

Language 70: 3, 491–538.

岡田 聡宏・井門 亮（forthcoming/2012）「アドホック概念：仕組みと可能性」松島 正一（監）『ヘルメスたちの饗宴―英語英米文学論文集』東京：音羽書房鶴見書店.

Sperber, Dan and Deirdre Wilson（1986/1995）*Relevance: Communication and Cognition*, Oxford: Blackwell.

Vega Moreno, Rosa E.（2001）"Representing and processing idioms," *UCL Working Papers in Linguistics* 13, 73–107.

Vega Moreno, Rosa E.（2003）"Relevance theory and the construction of idiom meaning," *UCL Working Papers in Linguistics* 15, 83–104.

Vega Moreno, Rosa E.（2005）"Idioms, transparency and pragmatic inference," *UCL Working Papers in Linguistics* 17, 389–426.

Vega Moreno, Rosa E.（2007）*Creativity and Convention: The Pragmatics of Everyday Figurative Speech*, Amsterdam: John Benjamins.

Wilson, Deirdre（2004）"Relevance and lexical pragmatics," *UCL Working Papers in Linguistics* 16, 343–360.

Wilson, Deirdre and Robyn Carston（2007）"A unitary approach to lexical pragmatics: Relevance, inference and ad hoc concepts," In Noel Burton-Roberts（ed.）*Pragmatics*, 230–259, New York: Palgrave Macmillan.

Idiom Interpretation and Ad Hoc Concept

IDO Ryo

Recent approach to lexical pragmatics within the framework of relevance theory, such as Wilson (2004) and Wilson and Carston (2007), claims that the concept linguistically encoded by word may be pragmatically adjusted (i.e. *lexical broadening* or *narrowing*) and construct ad hoc concept as a part of the pragmatic process of interpreting the speaker's intended meaning. This inferential process which is guided by the principle of relevance is called *ad hoc concept construction*. It sheds new lights not only on the recovery of the explicature of the utterance, but also on the understanding of figures of speech such as metaphor. In her series of analysis of idiom, Vega Moreno (2001, 2003, 2005 and 2007) takes this idea of ad hoc concept one step further by expanding its applicable scope from word level to phrase level, and argues that during the comprehension process of utterance containing an idiom, ad hoc concept is constructed at phrase level. Although I acknowledge the contribution of her theory in the field of lexical pragmatics, there seems at least some examples of idioms which her account cannot deal with. In this paper, after reviewing Vega Moreno (2007), I will make some remarks on her approach, and offer possible alternatives to it as well as some suggestions for further research on idioms using the framework of ad hoc concept.